

タイ、チョンブリ県における町ぐるみ高齢者ケア・ 包括プロジェクト：サンスク町をパイロット地域 として(第2報)

著者	東田 吉子, 坂戸 千代子, 細谷 たき子, 堀内 ふき, 菊池 小百合, 山崎 ひろ子, 工藤 清美, 佐藤 利春
雑誌名	佐久大学看護研究雑誌
巻	12
号	2
ページ	175-184
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1050/00000265/



活動報告

タイ、チョンブリ県における 町ぐるみ高齢者ケア・包括プロジェクト —サンスク町をパイロット地域として— 第2報

Community Based Comprehensive Elderly Care Project
in Chonburi Province, Thailand
—Project in Saensuk Municipality as a Pilot Area—
(The 2nd Report)

東田 吉子^{*1} 坂戸 千代子^{*3} 細谷 たき子^{*1} 堀内 ふき^{*1}
菊池 小百合^{*2} 山崎 ひろ子^{*3} 工藤 清美^{*3} 佐藤 利春^{*4}

Yoshiko Tsukada, Chiyoko Sakato, Takiko Hosoya, Fuki Horiuchi,
Sayuri Kikuchi, Hiroko Yamasaki, Kiyomi Kudo, Toshiharu Sato

キーワード：高齢者ケア，ヘルスポランティア，バンセン・ヘルスフェスティバル，人材育成
Key words : Elderly care, Health volunteer, Bangsaen Health Festival,
Human resource development

Abstract

Saku city and Saku University have implemented JICA Partnership Project, "Community-based Comprehensive Elderly Care Project in Chonburi Province, Thailand: Project in Saensuk Municipality as a Pilot Area. Its execution period was from Jan., 2016 to Dec., 2018. Five expected outcomes of the project were: 1. To establish Health, Medicine and Welfare Committee for the elderly care, 2. To make a plan of home-care services and its implementation by nurses and health volunteers, 3. To reform Community Health Committee for organizing systematic community activities, 4. To improve health promotion exercises at local temples targeting the elderly people, 5. To encourage positive contribution to home-care services and community activities by nurses, physical therapists and health volunteers who were trained in Saku city. Outline of the project and activities from Jan. 2016 to Sep.31, 2017 were reported in Saku University Journal 11-1.(2019). As the 2nd report, we describe establishment of home-care service system, results of mid-term evaluation, the 1st Bangsaen Health Festival and final evaluation points.

受付日2019年10月1日 受理日2020年1月21日

*1 佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

*2 佐久大学信州短期大学部 Department of Shinshu Junior College at Saku University

*3 元佐久市高齢者福祉課 Saku city, Elderly Welfare Section

*4 元JICA 駒ヶ根 Japan International Cooperation Agency Komagane

要旨

佐久市・佐久大学は、2016年1月25日～2018年12月31日までJICA((独)国際協力機構)より草の根技術協力事業(2014年度地域活性化特別枠)「タイ、チョンブリ県における町ぐるみ高齢者ケア・包括プロジェクト―サンスク町をパイロット地域として―」を受託し実施した。プロジェクトの成果目標は、1. 高齢者保健医療・介護推進委員会が設置される。2. 訪問ケアが企画され実施される。3. 地域保健委員会が再編される。4. お寺単位の介護予防活動が改善される。5. 佐久市で研修を受けた看護師、理学療法士、ヘルスボランティアが訪問ケアおよび地域活動に貢献する。本プロジェクトの概要、および2017年9月末までの活動について、第1報として昨年の佐久大学紀要(佐久大学看護研究雑誌11巻1号2019年)に活動報告を掲載した。本第2報では、在宅ケアの仕組みづくり、中間評価の結果、住民の健康意識の向上を目指してプロジェクトの主な活動の1つとして位置付けてきた「バンセン・ヘルスフェスティバル」の開催、最終評価のまとめを報告する。

I. 緒言

2016年1月、本プロジェクト開始後のタイの高齢者ケアに関する状況を概観すると、2017年7月、日本の厚生労働省とタイ保健省の間で11項目からなる協力の覚書(MOC)が交わされた(経済産業省, 2019)。その中には、①保健医療従事者に対する研修、②高齢化社会における政策形成への協力が含まれている。また、日本の公的な国際協力の機関である(独)国際協力機構(以下JICA)は、2017年11月より2022年迄タイ保健省と社会開発・人間の安全保障省、国民医療保障機構関係者と共に72県のうち、7県1都を対象とする「高齢者のための地域包括ケアサービス開発プロジェクト(S-TOP)」が開始された。このS-TOPプロジェクトでは、急性期病院から退院後、コミュニティ・ホスピタルへ転院、リハビリテーションの期間を過ごしたのち帰宅することにより寝たきりを減少させることを目指している。タイ政府の政策では急性期病院から自宅へのシームレスケアの流れの構築において、現コミュニティ病院をリハビリテーションの中間施設として根づかせることを推進している。

一方、佐久市・佐久大学が実施したプロジェクトでは、サンスク町という1つの自治体の中で、在宅ケア対策・システムづくり、地域活動の拡大、ヘルスボランティアらへの研修による人材育成など、地域密着型の活動を展開してきた。タイに於いて2つのプロジェクトは、協力し合い相乗効果を持っている。S-TOPプロジェクトは、当初からセラピストが中心のプロジェクトである。サンスク町プロジェクトは当初、看護師が中心であったが、経過のなかで、サンスク町および佐久市関係機関のセラピストの協力を得た。S-TOPプロジェクトはタイ保健省と協力して政策面に強みを持ち、佐久市・佐久大学のプロジェクトは、地方自治体と協力して地域活動・在宅ケアに強みを持っている。

2017年11月、タイ保健省は「ケアマネージャー」の育成制度を打ち出し、2週間(72時間)の研修を開始した。現在、サンスク町の看護師9人のうち5人がこの研修を修了しており、各自が30人の患者のケアプランを作成している。

Ⅱ. タイ、チョンブリ県、サンスク町におけるプロジェクトの状況について

1. チョンブリ県サンスク町の地図

プロジェクト・サイトは、タイの東部、チョンブリ県、サンスク町で首都バンコクから約100km、高速道路で約1時間の距離である。2016年1月、プロジェクトの開始時は、町は26地区に分かれていたが、2017年、2つの地区が合併し、25地区となった。2017年度に、活動を20地区に広げ、2018年度は、残りの5地区を加え町全体で活動を行った。



図1 タイの地図

2. 本プロジェクトの成果目標

- 1) サンスク町高齢者ケア強化方針の下、「高齢者保健医療・介護推進委員会」が設置される。
- 2) ヘルスボランティア及びヘルスセンターの看護師による訪問ケアが企画され実施される。
- 3) 既存の地域保健委員会が体系的に活動できるように再編される。
- 4) 既存のお寺単位の介護予防活動が高齢者の健康状態にあったプログラムに改編され、支え合う活動を基本にきめ細かなプログラムが実施される。
- 5) 佐久市で研修を受け帰国した人たちがサ

ンスク町のキーパーソンとなり活動の継続と発展に寄与する。

3. サンスク町における在宅ケアの仕組みづくり

プロジェクト開始前(2016年2月以前)、サンスク町では町の行政に勤務する看護師が患者の家庭を訪問する在宅ケアは、緊急時、および1か月に1回程度で細々で行われていた。訪問件数は多くなかった。看護師数は9人で、高齢者ケア専任のシステムはなく、各看護師の担当地区で公衆衛生、母子保健、学校保健、高齢者ケアの全てを実施しており、在宅ケアにあてる時間は少なかった。

プロジェクト開始後(2016年2月以後)、図2の「サンスク町在宅ケアモデル」が作られ、町のリーダーたち約50人が委員となっている「高齢者保健医療・介護推進委員会」でこの在宅ケアモデルが承認され、町のヘルスボランティアたちへ周知されると、地域の事情を良く知るヘルスボランティアからサンスク町の看護師へ電話で在宅訪問が必要と思われる患者がいるとの連絡が入るようになり、登録患者数が増えていった。また、プロジェクト開始直後、地区のヘルスボランティアが60歳以上の高齢者宅の全戸訪問を行い、その様子を随時看護師へ報告した。報告を受けた看護師はバーセル・インデックスにより患者のランク付けを行い、訪問が必要な患者を登録した。患者数は増え、その結果、次第に看護師も地区のヘルスボランティアも在宅ケアを実施する回数が増えていった。

4. 中間評価の結果について

1) 在宅ケアに対する患者・家族の評価

プロジェクトの活動開始1年後である2017年2月末～3月末、中間評価として、登録患者・家族へのサービスの状況を確認するためサンスク町とプロジェクトが共催で看護師、ヘルスボランティアおよび患者と家族へ満足

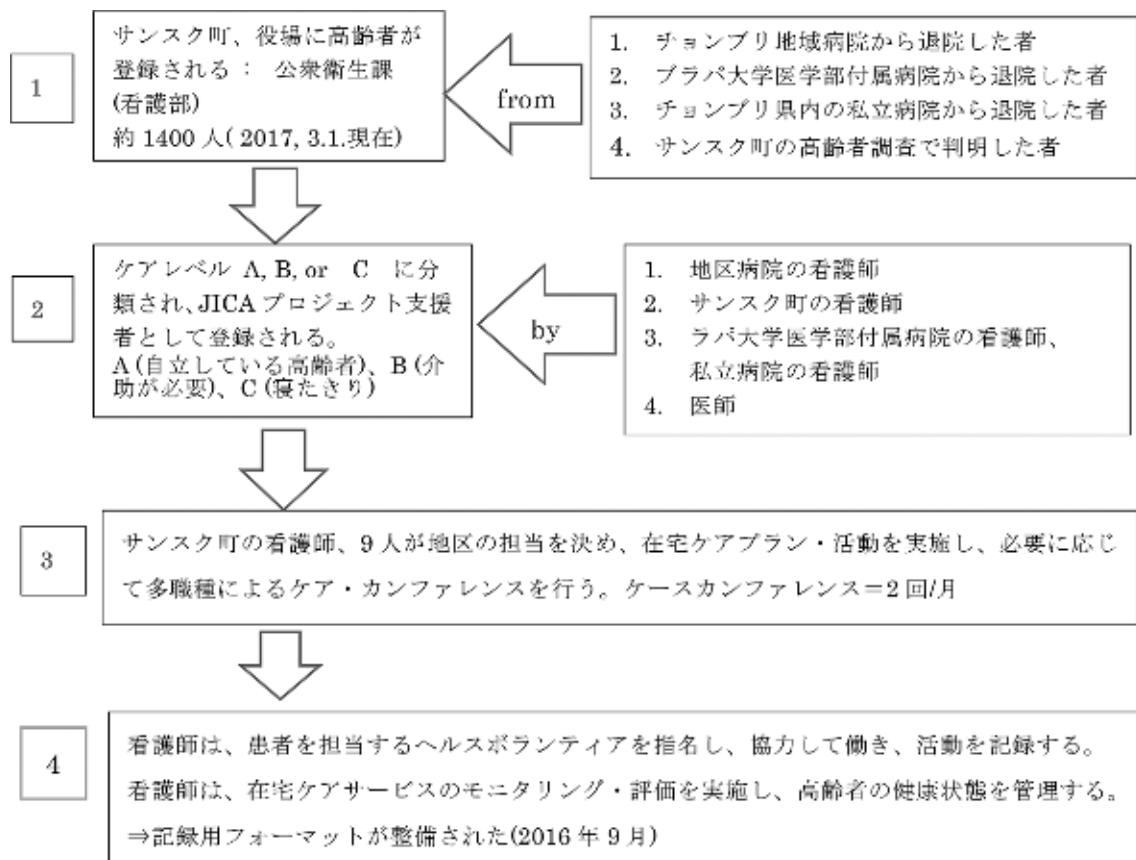


図2 サンスク町在宅ケアサービスシステム

表1 サンスク町の調査2016-2017年

		とてもよくした n(%)	まあまあよくした n(%)	あまりしなかった n(%)	全くしなかった n(%)
	あなたはヘルスボランティアが困ったときに適切な支援・相談をしましたか。				
看護師 N=8	2016年2月プロジェクト開始前	1(12.5)	2(25.0)	5(62.5)	0(0)
	2017年2月末	1(12.5)	4(50.0)	3(37.5)	0(0)
	あなたは家族が困ったときに適切な支援・相談をしていたと思いますか。				
ヘルスボランティア N=48	2016年2月プロジェクト開始前	0(0)	11(22.9)	23(47.9)	14(29.1)
	2017年2月末	2(4.1)	22(45.8)	23(47.9)	1(2.0)
	あなたはヘルスボランティアに相談をしていましたか				
患者・家族 N=98	2016年2月プロジェクト開始前	5(5.1)	22(22.4)	37(37.7)	34(34.6)
	2017年2月末	6(6.1)	50(51.0)	40(40.8)	2(2.0)

表2 サンスク町の調査2017-2018年

		とても よくした n(%)	まあまあ よくした n(%)	あまりしな かった n(%)	全くしな かった n(%)
あなたは高齢者およびその家族を支援したり、相談に乗ったりしてましたか					
ヘルスボラン ティア N=84	2017年2月末	14(16.7)	45(53.6)	22(26.2)	3(3.5)
	2018年4月	18(21.4)	59(70.2)	7(8.3)	0(0)
あなたはヘルスボランティアへ相談をしていましたか					
患者・家族 N=95	2017年2月末	2(2.1)	39(41.0)	19(20.0)	35(36.8)
	2018年4月	13(13.7)	63(66.3)	17(17.9)	2(2.1)

度に対するアンケート調査を行った。その結果、プロジェクトの開始前と開始後・2017年2月では、全成果目標において改善が見られた。アンケート調査方法及び結果は以下の通りである。

調査方法: プロジェクト補助員(看護師)がサンスク町の看護師、ヘルスボランティアへ調査の目的、方法等についてタイ語で説明し、無記名自記式のアンケート調査を実施した。調査票はプロジェクト補助員が用意した袋に提出するように依頼した。患者や家族へはサンスク町の看護師がタイ語で説明し同様の方法で実施した。

倫理的配慮: 調査は、匿名であり協力を拒否しても個人の利益に何ら影響を与えるものではないこと、調査結果は、サンスク町の在宅ケア・サービスの改善のため参考にする以外には使用されない、ことをタイ語で説明し了解が得られた看護師、ヘルスボランティア、患者・家族を調査対象とした。

表1の看護師では、プロジェクト開始前にヘルスボランティアへの支援について、「まあまあよくした2人(25.0%)」がプロジェクト開始後には4人(50.0%)に増えており、プロジェクト開始後、看護師の高齢者ケアへの意識が高まっていると推察できた。しかし、8人の看護師の中には、地域の担当者であるが、

母子保健、或いは環境保健を主な活動としており、高齢者の状況については、ヘルスボランティアから報告を受けるに留まっている者もいるため、「あまりしていなかった5人(62.5%)」から約1年後の本調査時も「あまりしていない3人(37.5%)」と回答していた。

ヘルスボランティアへのアンケートでは、家族への支援について、プロジェクトの開始前に「まあまあよくした11人(22.9%)」であったが、開始後には、22人(45.8%)で約2倍となりヘルスボランティアのモチベーションが向上し、訪問回数が増えたことを表している。また、プロジェクト開始前に「全くしなかった14人(29.1%)」は、開始後には、1人(2.0%)と大きく減少し、ヘルスボランティアによる活動が活発になっていることが推測できた。2017年2月までに、ヘルスボランティアは、サンスク町において日本の短期専門家から3回の研修を受け、6人が佐久市における本邦研修を修了していた。アンケートにおけるコメント欄には、①以前は地域の高齢者や家族を支援できなかったが、研修後多くの高齢者を支援できるようになった(5名)、②研修で、高齢者の特徴と障害者について学んだ。③看護師、PT他職種とのカンファレンスに出席する機会を得るなど研修により高齢者のケアをする自信ができた。④ヘルスボランティア

の仕事を楽しいと感じるようになった。⑤ヘルスボランティアと患者の関係が良かった(3名)、など自信を持って在宅ケアに取り組んでいるコメントが見られた。

高齢者の患者・家族では、プロジェクト開始後、ヘルスボランティアへ「まあまあよく相談している」と答えた者が22人(22.4%)から50人(51.0%)に増え、「全く相談していなかった」患者・家族は、34人(34.6%)から2人(2.0%)に減少している。この結果から患者・家族は、プロジェクトの開始後、ヘルスボランティアの訪問回数が増えるにつれて徐々にヘルスボランティアを信頼するようになってきていることが理解できる。

更に、プロジェクト開始後2年過ぎた、2018年4月、サンスク町は下記のような類似のアンケートを実施し、地域活動の成果を確認することができた。

2018年4月の調査時は、16人のヘルスボランティアが佐久市において研修を終え、帰国後地域活動および在宅ケアの核となり活動が盛んになってきたころであった。表2において、2017年2月末と2018年4月初めの結果を比較すると全ての項目において向上している。特に、2017年の調査時に「あまりしなかった22人(26.1%)」と回答した人数は、2018年には7人(8.3%)と大きく減少し、「まあまあ良くした」と回答した者は、2017年の45人(53.5%)から59人(70.2%)へと増加し、2年間の活動でヘルスボランティアの在宅ケアサービスはより活発になっていった。

プロジェクト開始1年後の中間調査時のコメントを見ると、ヘルスボランティアと患

者・家族との関係が良くなった、と回答したヘルスボランティアがいたが、表2の回答により家族がヘルスボランティアを信頼し、相談する件数が大きく増えていることが判明した。

5. バンセン・ヘルスフェスティバル

動機づけから開催まで

本プロジェクトの成果目標の5番目の活動の1つとしてブラパ大学病院に於いて病院祭を開催することを挙げていた。その背景には、第1報で記した通りサンスク町の生活習慣病の割合は大変高いが、地域の高齢者は、「年を取れば病気の1つや2つがあって当たり前」という既存の伝統的な考え方が強く、健康に老いるという考え方が希薄であることが考えられる。ブラパ大学病院は、町で唯一の総合病院であるため、地域に根差した病院として佐久市のぞっこんさく市、佐久総合病院をモデルとして住民への疾病予防を目的とした啓蒙活動に寄与して欲しい、というプロジェクトの期待が込められていた。サンスク町は海辺の観光の町であり、ヘルスボランティアの多くは夕方は、屋台の店を営んでいる者もあり、祭りのブース作りは慣れていた。このような背景から、サンスク町から佐久市へやってくる春の看護研修プログラムには、「佐久病院祭」の見学研修を組み入れ、どのように病院をオープンし住民へ健康知識を普及させているかを体験してもらうこととした。又、秋に実施したヘルスボランティアへの介護研修では、佐久市・佐久商工会議所が主催している「ぞっこんさく市」の健康館の活動を体験

表3 佐久市に於ける研修参加者数(佐久病院祭・ぞっこんさく市への参加を含む)

年	佐久病院祭(5月)	ぞっこんさく市(10月)
2016	5人(看護師(4)、PT(1))	7人(ヘルスボランティア(6)、看護師(1))
2017	13人(看護師(9)、PT(3)、行政公衆衛生課長(1))	13人(ヘルスボランティア(10)、介護士(1)、看護師(2))
2018	16人(看護師(5)、薬剤師(1)、ヘルスボランティア(10))	

してもらおうと共に、地元の産物が並ぶブース等で入場者が楽しめる工夫についても気を留めてもらうこととした。

表3の通り、サンスク町行政、ブラパ大学病院、ブラパ大学看護学部等のプロジェクト関係者54名が佐久市を訪れ、佐久病院祭、ぞっこんさく市を体験し、その経験を活かしてサンスク町町長、ブラパ大学医学部長、ブラパ大学病院長を中心とする準備委員会を立ち上げ、「第1回バンセン・ヘルスフェスティバル」、2018年1月9日、10日の2日間開催が企画された。この決定に先立ち、2017年9月には、佐久総合病院の経験を傳承すべく地域ケア科小松医師、關統括看護部長、佐久市ものづくり研究会白鳥会長らがサンスク町を訪問し、準備のプロセスについて講演を行った。佐久総合病院の1946年から「農民と共に」を合いことばに72年間継続されている病院祭の取り組みでは疾病の変化・社会の変化に応じた病院祭の継続の大切さ、家族で楽しめる健康祭という趣旨が説明された。

1) 【第1回バンセン・ヘルスフェスティバルの概要】

日時: 2018年1月9日(木)、10日(金、AMのみ)

1月9日病院内、外のブースで展示、1月10日AM講演会

2) 第1回バンセン・ヘルスフェスティバルの様子

約2年間の研修員たちのこころの準備を経て実現された第1回フェスティバルは、実際に準備委員会が行動し始めたのは、本番の4か月前からであり、日本と異なる短期間の準備に日本側関係者は実現について心配していたが、当日は大変な盛り上がりを見せた。タイ特有の早朝行進がサンスク町役場を7:30に出発し、200人ほどがグループとなり、それぞれの健康や疾病予防に対する思いを仮装やプラカードに掲げて音楽と共に会場となるブラパ大学病院まで練り歩くことから始まった。チョンブリ県副知事、ブラパ大学学長、サンスク町町長、ブラパ大学医学部長、

表4 第1回バンセン・ヘルスフェスティバルの概要

日時	2018年1月9日 7:30-16:00
テーマ	Health for All
大会実行委員長 副委員長	サンスク町町長 ブラパ大学医学部長
主催	サンスク町
共催	本JICAプロジェクト
後援	佐久市商工会議所佐久ものづくり研究会、JICAタイ事務所、在タイ日本大使館
場所	国立ブラパ大学病院内、および中庭の駐車場
ブース数	32(内、佐久市からの出展ブース: 4(内訳: プロジェクトの展示および血糖値測定、F.B介護サービス、マイクロ・ストーン(株)、しなの(株)))
2日間の入場者数	1,500人
講演会	
日時	2018年1月10日 8:30-12:30
講師 仲元治氏	テーマ: 東南アジアの糖尿病事情 (講師: 国保浅間総合病院糖尿病センター長)
講師 菊原明美氏	テーマ: 糖尿病患者への生活支援 (講師: 国保浅間総合病院看護部長)
講師 堀内ふき氏	テーマ: 認知症ケア (講師: 佐久大学学長)
健康産学ステージ紹介	
しなの(株)	ポールを使用した健康的な歩き方
マイクロストーン社	歩行スタイルの分析と健康
参加者数	200人(ブラパ大学医学生、看護学生、教員、地域住民)



写真1 第1回バンセン・ヘルスフェスティバル開会式の様子



写真3 ヘルスフェスティバルの会場案内

JICA次長、在日本大使館一等書記官、佐久市長、佐久大学学長が登壇し、華々しく開会式が行われた。会場は、①病院内(1階～6階)の展示、②病院前・駐車場特設会場のブース、③メインステージ、と3つに分かれた。近所の小学生らが招かれ絵のコンテスト、ゲーム、ダンス等のプログラムに参加していた。ブースでは、サンスク町のヘルスポランティアらは、主に自主的に開発したりハビリ用品を展示し、入場者は体験コーナーで楽しんでいた。大学の東洋医学部は、種々のハーブや温熱療法を指導、看護学部は、高齢者ケアを車椅子で体験するコーナーをオープンしていた。第1日目の展示に続く2日目の講演会では、ブラパ大学病院糖尿病専門医らも参加し、会場からの質問についてタイ語で説明するなど協力的であった。

3) 第1回バンセン・ヘルスフェスティバルの反省

良かった点は以下のようなものである。(1)このフェスティバルは、町が始まって以来あらゆるレベルの人々が協力して作り上げたものであった。(2)入場者は、約1,500人で平日にも拘わらず予想以上の人々が訪れた。(3)サンスク町では、このフェスティバルのために特に予算を計上していなかったため、手作りの行われた。

改善すべき点は以下のようなものである。(1)会場内の案内が不足しており、病院内の展示、メインステージでのプログラムが入場者に良く理解されていなかった。(2)2日目の講演会



写真2 サンスク町町長と高齢者ブースのヘルスポランティアたち

も会場案内が不足しており場所がわかりにくかった。(3)メインステージの音響が大きく、入院患者に迷惑だったのではないかと思われた。

Ⅲ. 佐久市等の協力組織から本プロジェクトの活動に関わった専門家による評価

専門家による評価は以下のようである。

1. 在宅脳卒中患者の中には、機能・能力の改善が緩徐に進んでいる好事例が確認できた。
 - 1) 寝たきりレベルが立位保持まで可能となった例が4件あった。
 - 2) 座位保持レベルが屋外監視歩行まで可能となった例が2件あった。
 - 3) セラピスト(PT)、ヘルスボランティア(HV)の訪問、HVが技術習得したケアを提供することで療養者の機能・能力の改善が見られた。
2. 看護師の意識に変化が感じられた。
 - 1) 情報共有が定着してきている。
 - 2) HVとの共同作業が定着してきている。
 - 3) 看護師が在宅訪問することで、療養者の生活の質が向上した。
3. HVの知識・技術は確実に向上している。
 - 1) 熱心なHVは提供したケアと患者の記録を継続的に記録した自己記録ノートを作っている。
 - 2) 研修を受けたHVのケア技術が向上している。
 - 3) 看護師、セラピストの指示通りの事を継続できている。
 - 4) HVらのグループが出来、中心人物がリーダー的役割を果たし始めている。
4. 看護師、セラピスト(PT)は、患者・家族の希望や意向を確認し、意向に沿ったサービスの組み立てができるようになった(療養者中心のケアの提供に意識が向

いた)、そして維持、改善の事例を生む結果となった。

5. 本邦研修参加者は、「高齢者、患者の残存機能をうまく使い、待つ介護をする」ことが高齢者の健康寿命の延伸につながるのではないかと考える。「全てを介助してあげることが良い介護とは限らない」と気づき始めた。

Ⅳ. 総括

2016年1月25日～2018年12月31日までの3年間の活動は計画通りに進み、成果目標を達成することができた。今後、サンスク町の看護師は、リーダーシップを発揮し、ヘルスボランティア(HV)の中でリーダーを育成し、地域活動を継続することが望まれている。更に、HVは知識と技術の研鑽に励み、3年間に培われた患者・家族との信頼関係を継続し、サンスク町の強みである近隣の互助を維持できる行動が期待されている。

サンスク町の保健医療職の人材不足は以前として課題である。セラピストの雇用をサンスク町へ提案している。

謝辞

本プロジェクトが当初の成果を達成できたことは、タイの関係団体の長をはじめとする関係者(チョンブリ県サンスク町、ブラパ大学、ブラパ大学病院、サミティベート病院等)、およびオール佐久チームを総称する長野県佐久市の関係団体の長をはじめとする関係者(佐久市、佐久大学、佐久市立国保浅間総合病院、JA長野厚生連佐久総合病院、企業関係者等)の協力の賜物であり、またJICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所・JICA東京・JICAタイ事務所・在タイ日本大使館からのバックアップとご支援がなければ、このような種々の事業を完了できなかつた事を思い関係者の

みなさまへこころより御礼を申し上げます。

引用文献

厚生労働省(2019). タイとの協力覚え書き.
2019/8/14, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188516_00010.html

経済産業省(2019). 平成30年度国際ヘルスケア

拠点構築促進事業(国際展開体制整備支援事業)医療国際展開カントリーレポート
新興国等のヘルスケア市場環境に関する基本情報. タイ編. 2019/8/14,

JICA 高齢者のための地域包括ケアサービス開発プロジェクト. 2019/8/14, <https://www.jica.go.jp/project/thailand/026/news/20180914.html>